

P3-76.

東京医科大学における Team-Based Learning (TBL・チーム基盤型学習) の授業展開と学生による評価

(大学: 医学教育学)

○菰田 孝行、R. ブルーヘルマンス
荒井 貞夫、泉 美貴

(大学病院: 循環器内科)

山科 章

(大学: 医学教育学・大学病院: 総合診療科・北海道大学医学教育推進センター)

大滝 純司

(社会人大学院 4年医学教育学)

閑 正康、赤石 雄

【背景】 従来型の講義形式の授業の限界から、学生主体の「能動的学習」が注目を集めている。TBL は、学生主導のチーム別討議形式によって学習を進めることにより、少人数の教員でも対応可能な、グループダイナミズムにもとづく学習方略として、注目されている。東京医科大学でも 2011 年から授業に取り入れている。

【目的】 東京医科大学における TBL 授業実践の結果を分析し、学生からの評価を通じて、TBL の授業展開の発展の視座を得る。

【方法】 2014 年 6 月 4 日 3 時限、医学科 4 年生の臨床医学 II 「循環器」において、TBL 形式の授業を実施した。授業者は、循環器内科の主任教授である。受講学生は、110 名であった。まず、学生に、個人テスト (IRAT) (10 問) を回答させた。さらに、同じ問題をチームテスト (GRAT) として出題し、チームで得点を競いながら回答させた。GRAT 終了後、授業者が回答へのフィードバックと解説講義を実施した。最後に、授業評価アンケートを匿名で実施した。

【結果】 GRAT における「チーム得点」を目的変数とした階層的重回帰分析では、「チーム構成員の最高得点」の項目が有意であった。授業評価アンケートでは、「予習をしたかどうか」の項目において「教科書をパラパラめくった程度」の項目への回答が最多であった。「これからも TBL の授業を受講したいか」の項目で、「受けでみたい」と「まあ受けでみたい」を合わせた回答者の割合は 59% にのぼった。

【考察】 TBL の得点結果分析から、チーム内の成績優秀者がチーム得点を押し上げている状況が明らかになった。チームの編成を工夫し、チーム内の学習が促進されるような施策が必要であると考えられる。また、授業評価アンケート結果から、TBL を好意的に受け入れているが、予習をするまでには至らない学生の現状が明らかになった。予習を促進させ、グループダイナミズムにもとづく教えあいを促し、授業効果をさらに向上させる施策が必要であると考えられる。

P3-77.

e ラーニングから得られる学習履歴データの有用性についての検討

—2014 年度循環器系の例

(大学: 医学教育推進センター)

○油川ひとみ、泉 美貴、山科 章

(大学: 医学教育学分野)

ブルーヘルマンス R.、泉 美貴

(大学: 循環器内科学分野)

山科 章

【はじめに】 e ラーニングシステム「e 自主自学」を授業に使用し、得られたデータをもとに、学生支援および授業改善に利用可能か検討した。

【方法】 2014 年度医学科 4 年生の臨床医学 II 循環器系の授業において e 自主自学の使用結果を調査した。使用内容は、小テスト (43 回 / 全 47 回)、授業評価 (全授業)、授業資料の掲載 (全演習授業後と教員による任意での掲載)、英語の単語集・略語集の掲載、であった。e 自主自学で得られた学習履歴をもとに、各学生の小テストの受験率と成績 (① 筆記試験全体の成績、② MCQ の成績、③ 記述式問題の成績)、授業評価の提出率と成績、資料閲覧率と成績 (① 筆記試験全体の成績、② 記述式問題の成績)、単語集閲覧の有無と単語問題の成績について、統計学的検討を行った。また、授業評価に記載されたコメントも調査対象とした。

【結果】 χ^2 乗検定により有意差が見られた項目には、① 小テストの受験率と MCQ の成績、② 授業評価の提出率と成績があった。弱い相関が見られたものに、① 小テストの受験率と成績、② 小テストの受験率と記述式問題の成績、③ 資料閲覧と記述

式問題の成績があった。単語集閲覧率と単語テストの成績はt検定を行ったが、有意差は見られなかった。授業評価のコメントは134件あり、全体の56%が授業内容に関するものであった。その中で、「授業がわかりやすかった」等のプラスの評価が35%であり、「授業がわかりにくかった」「授業のスピードが速すぎた」等のマイナスの評価が65%であった。テキスト・資料についてのコメントは、全体の11%であったが、その過半数が、「授業内容とテキストを一致させて欲しい」等の要望であった。

【結語】 循環器系におけるe自主自学の学習履歴のデータから成績との相関が見られるものがあった。小テストおよび授業評価等の課題を行う頻度と成績には相関が見られた。授業評価からも学生支援および授業改善へつながるデータが得られたと考えられた。

P3-78.

成功した医師の体験を集積し、医師のキャリア形成におけるモデルを探る

(医学部医学科3年)

○竹沢 亜美、茂手木壽明、近藤 綾

光永 りさ

(大学: 医学教育学)

泉 美貴

【目的】 医師がキャリアを成功するために、必要な要素とは何かを探る。

【方法】 対象は、本邦の医科大学や大学附属病院において准教授以上の職掌にある男女6名。方法は、インタビュー調査を以下の内容で実施した。女性医師への項目：1) キャリア形成の過程で生じた困難、2) 対処法、3) キャリアを継続できた理由、4) 精神的因素、5) キャリア形成に成功した女性医師に共通している要素、6) キャリア形成が難しい女性医師に共通して不足している要素、7) ガラスの天井について、8) ワークライフバランスについて、9) 後進へのアドバイス。男性医師への項目：1) 共働きのメリット、2) デメリット。

【結果】 <女性医師> 1) 子供の病気、診療以外のduty、結婚・出産・子育て、夫の仕事に対する理解不足、2) 配偶者・両親・シッターなどの協力、留学、離婚、3) 家族の精神的支援、モチベーション、健康、

発信する、仕事を引き受けた、4) メンターの重要性、プロ意識、5) やりたい事が明確、ポジティブに考える、他者に助けを求める、6) 人に頼めない、専門職という自覚の欠如、心身ともに健康でない、コミュニケーションをとらない、7) 存在しない、職種間や専門領域に対する天井を感じる、8) “ワークライフデザイン”、ワークとライフは一体、9) 教育を社会に還元してほしい、家事はしてはいけない。<男性医師> 1) 収入が高い、妻が社会の刺激を受ける、職業への理解、2) 夫も家事をする必要がある。

【考察】 男女ともに家事・育児をどちらかがするものという固定観念を払拭すべきである。医師としては、コミュニケーションを積極的にとること、機会は引き受けること、発信すること、ソーシャルサービスを利用することなどの行動力が重要である。また、メンターを得ることや家族の理解という人的環境を整える必要がある。モチベーションを高く保ち、医師は専門職であることを自覚することにより、教育を一生社会に還元することが肝要である。

P3-79.

学生によるeラーニング教材作成の試み

(医学部医学科3年)

○森 早諭里、飯田 瑞希、池田千枝莉

木村 莉菓

(大学: 医学教育学分野)

ブルーヘルマンス R.、菰田 孝行、泉 美貴

(大学: 医学教育推進センター)

油川ひとみ、泉 美貴

【背景・目的】 近年の情報化社会では教育現場にもICT活用が浸透し、東京医科大学でも教育効果の向上のためにeラーニングが導入された。現在のところ私たち学生が実際に使う機会は、学習面では授業後的小テストやレポートの提出、また、掲示板での事務的連絡にとどまっている。グループ別自主研究において、eラーニングの現状を見直し、本校医学部医学科3年生を対象としたeラーニング教材を作成し、その満足度を計ることを目的とした。

【方法】 教材作成にあたり、eラーニングだからこそできることとは何か、学生目線でどうしたら学習しやすいのか、を意識し、eラーニング教材が高い